

Trial & Error トリアル・アンド・エラー No.109

試 行 錯 誤



1990年12月, JVCは7年半にわたるソマリアでの活動を終えた

特集 検証 ソマリアプロジェクト

ソマリアプロジェクト8年の歩み	3
国際戦略にからめ取られたソマリアの難民問題	6
どのようにして家畜プロジェクトは始まったのか	9
農民の話	10
ローカルスタッフとは何なのか?	11
JVCはソマリアプロジェクトから何を学んだか?	12
ソマリアのこと, 難民のこと	16
AFRICA IN CRISIS-1 内戦下の危機	17
(タイ) ドライビングスクールの建設	18
ビルマ難民, その後	20



検証 ソマリアプロジェクト



1983年3月より開始したソマリアにおける農業プロジェクトを、1990年末をもって終了した。タイ・カオイダン技術学校に次ぐ、7年9カ月に及ぶ長いプロジェクトだった。それはまさしく、JVCの歴史の一部を作り、また、模索しながら進むJVCを体現したようなプロジェクトだった。イスラム教、遊牧民、難民の地域統合、半砂漠での農業等、新しい体験の前で、苦しみ、方向を見失うこともあった。

プロジェクトの閉鎖決定は、エチオピア・ソマリア間に和平が成立したにもかかわらず、動く気配の乏しい難民に関わり続ける弊害を考え、JVCとして既に精算すべき時期にきていると判断した事による。時同じく、激化した反政府活動により、地域開発プロジェクトの可能性を探っていたのをあきらめ、全面撤退を余儀なくされた。

学んだ事は実に大きい。難民から地域開発へ視点を移してきたJVC全体の歩みは、ソマリアの体験を踏まえたものとも言える。本号ではソマリアプロジェクトが難民たちにとってなんだったのか、学んだ事は何かなどをまとめてみた。

会員の方のご意見を期待している。

ソマリア概要

国名：ソマリア民主共和国 (Somali Democratic Republic)

面積：637,663km² (日本の約1.8倍)

(農耕地：8.2km²，牧草地：28.8km²)

人口：571万人 (1987年)

首都：モガディシュ (Mogadishu, 人口約65万人)

地現的位置：アフリカ大陸の北東部に位置し、南緯2度から北緯12度にまたがりアデン湾とインド洋に面し、北部はジブチ、西部はエチオピア及びケニア、南部はケニアと国境を接している。「アフリカの角」と呼ばれる戦略的に重要な地域。

気候：海岸部は高温多湿で、内陸部は、高温乾燥である。気温は18℃～35℃。雨量は南部地方で年間320～500ミリ、北部の高原で500ミリ程度である。4～6月が大雨季。4月が最も暑い。

民族構成：ソマリ族が90%

宗教：95%以上がイスラム教徒 (主としてスンニー派)

言語：公用語はソマリ語。その他英語、アラビア語、イタリア語。

(ソマリ語は、1972年にローマ字化した)

産業：牧畜 (牛、山羊、羊、ラクダ：総輸出額の約80%)、農業 (バナナ、砂糖きび)

一人当たりGNP：170ドル (1988年ユニセフ資料)

5歳未満児の死亡率：1000人当たり218人 (1988年ユニセフ資料、日本は同6人)



ソマリアプロジェクト8年の歩み

山口誠史

農業プロジェクトの開始(1983～1986)

1979年のオガデン紛争を契機として、人口650万人の最貧国ソマリアに、80万人もの難民が逃れてきた。国連機関、各国のNGOが大量の援助を実施したこともあって、JVCが本格的な調査を開始した1983年当時、すでに緊急状態は去っていた。しかし、難民キャンプの人々は、生活の基盤である家畜も土地も失い、いつ故郷に帰れるとも知れず、ひたすら国連の食糧配給に頼って生きているという状態であった。この人たちに、何とか自立の道を開くための活動をというのが、JVCソマリアプロジェクトの目的であった。

活動地のゲドー郡ルーク地方マガネイ地区は、年間降水量が200ミリ以下という乾燥地帯であったが、幸いソマリアの二大河川の一つであり1年中涸れることのないジュバ川が流れている。JVCは調査の結果、ジュバ川からディーゼルポンプで水を揚げる灌漑農業を行うことを決定した。

プロジェクト開始当初から1986年末までのマガネイ地区の農場建設は、基本的にJVCが土地交渉、整地、主水路作りを労働者を雇って行い、それと並行して難民を選抜して、第二水路以降の共同作業を農民自身が参加して行い、その後農地を分配するというものであった。また、据え付けたポンプや農機具は無料で農民委員会に提供し、2回目の収穫まではディーゼル代もJVC負担であった。この方式により、マガネイ地区に5つの農場を建設した。

しかし、この方式はいくつかの問題点を含んでいた。第一に、農民選抜の段階でキャンプの責任者との協議が必要だったため、責任者の縁故や利権の種に利用され、公正な選抜を実施するのが非常に困難であった。第二に、一つの農場に遊牧民を含む複数の部族がいっしょに共同作業をすることになり、部族対立が農場運営に障害になった。もともと異なる部族が一つの農場で畑を耕すことを初期のスタッフは理想としたが、共同作業に出てこなかったり、農民委員会が機能しなかったりと、部族混成の農場は苦勞続きであった。第三に、JVCが中心となって農

場建設を行い、ポンプやほかの物も無償で農民に供与することは、農民のJVCへの依存体質をつくり、自ら努力したり工夫したりする自立心を阻害する結果となってしまった。

とはいえ、JVCの農業技術者が中心となっておこなった農場建設で、水路沿いを中心とした植林と果樹の栽培、多品種栽培、地力保持のための緑肥や獣糞利用などを農民に指導し、1988年までには一部の農場を除いて大半の農場が緑に覆われた。主食のトウモロコシをはじめ、タマネギ、トマト、ゴマなどを作り、一部は自家用として、残りは市場に出して現金収入を得て生活を支えていた。

コミュニティーサービスへの拡張(1986)

1986年からは、それまでの農場内の植林から難民キャンプへの苗木配布などへ植林活動を展開した。難民キャンプを含む地域開発の第一歩である。

その後、難民キャンプ内でどんなニーズがあるかを調査し、その結果をもとに鍛冶屋やパン屋、水売りなどの現金収入への支援(インカムジェネレーティング)や、燃料効率を高める料理用コンロ作り教室や英語クラス、地元民を巻き込んだポンプトレーニングクラスなど教育活動も実施した。農民だけに限られていた対象者を広げ、かつ難民キャンプとその周辺全体の向上を目指したのがこれらコミュニティーサービスの目的であった。

それに先立つ1986年、にわかにUNHCRから定住計画を推進するよう要請があった。農業プロジェクトの対象者を中心に、難民キャンプから出て独自の村を作るという計画であったが、住民のニーズに基づいた計画ではなく、ソマリアの難民から手を引きたいという国連が、食糧配給だけに頼っている難民を少しづつでも難民キャンプから引き離そうという意図を持って計画したものであり、すぐに行き詰まりを見せてしまった。JVCも最初のうち、家屋建設などを始めたが難民自身が定住する意思を持っていないことがわかり1年余りで中止した。

保健プロジェクト (1985～1986)

1984年、アフリカ全土を襲った干ばつの影響もあり、エチオピアから新たに14万人の難民が流入した。ルーク地区でも多くの新難民が出てきて、すでに5、6年経過して落ち着いていた現存キャンプの難民と比べて、緊急に援助する必要があった。しかし、国連はその官僚機構の故か、すばやい対応ができず、いらだったJVCは極度の栄養不良児の一部を宿舎に收容すると同時に、国連に対し新難民の即時登録と救援を促した。

これをきっかけとして、JVCは新難民のために新設されたマグドールキャンプで、補助給食と保健医療のプロジェクトを担当することになった。マグドールにおける保健プロジェクトは、予防接種キャンペーンや2度にわたるコレラ発生の危機を乗り越え2年4カ月続いたが、1986年10月新難民の内陸部への移送により終了した。

ジャボレキャンプでの活動 (1985～1988)

ルーク地方マグドールキャンプから新難民が移送されるのに伴い、JVCの保健チームは活動地を内陸部のヒラン郡ジャボレキャンプに移した。ジャボレでは、難民が来る前からキャンプ建設を含めて受け入れ体制を進めていった。活動もマグドール以来の保健プロジェクトに加えて、植林や教育、インカムジェネレーティングなど、キャンプ全体の生活向上のための活動に広がった。

難民の移動とともに活動を続けるJVCに対する人々の信頼は厚く、活動は順調であったが、ソマリア政府に多額の援助をしているサウジアラビア政府系の団体への保健医療プロジェクトの移管の後、資金不足もあって1988年3月ジャボレのプロジェクトを終了した。

グループファーム方式へ (1987～1990)

プロジェクト開始当初から実施してきたJVC主体の農場建設に対する疑問から、現地のスタッフ間で繰り返し討論が行われ、1987年から新たにグループファーム方式を導入することになった。この方式は、農業をやろうと希望する難民がグループを作り、農業用地を自ら探して交渉し、地主を巻き込んで自分たちで農場建設を行うものである。しかし、財産などない彼らには揚水のためのディーゼルポンプをを買うお金などなく、ポンプの提供をJVCに要請してくるのである。JVCでは適当と判断したグルー

【難民分布図】



プに対して、収穫後分割で代金を返済することを前提にポンプを設置し、合わせて農場経営や作付に関する技術指導を行うのである。一方的に何でも与えるという姿勢から、彼らにできない部分に対する最低限の支援ということにJVCの役割が変わっていったために、農民の自主性は推進され、農場の運営はうまく行くようになった。その一方で、農業の経験があるやる気のある人々しか対象にならないという不満もあった。

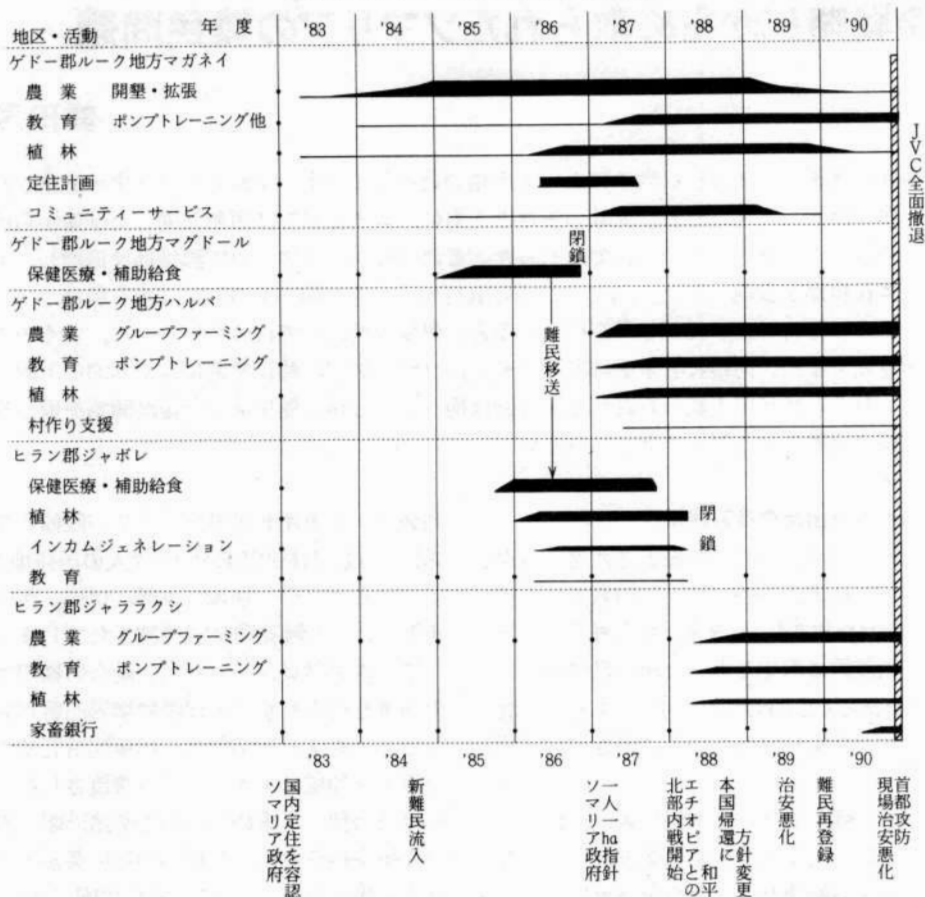
グループファーム方式の農場は、マガネイ地区にもう農場にできる場所がないという事情もあって、マガネイ地区からジュバ川の20km上流にあたるハルバ地区に建設された。この地区は難民キャンプから離れているせいもあって、最初から村作りを前提としており、JVCも井戸掘りや教育面での支援に取り組んだ。

ジャララクシでの活動 (1988～1990)

終了したジャボレのプロジェクトで中心となって働いていたソマリア人スタッフの強い要望により、1988年7月ジャボレ近郊のジャララクシで農業プロジェクトを開始した。ジャララクシは一番最後に始めた活動地であり、その意味で今までのいろいろなプロジェクトの経験がこの地で活かされることになった。

ここでは、最初からルークのハルバ地区で実施して、成功を納めていたグループファーム方式を導入し、また積極的にキャンプ内の植林やインカム

JVCソマリアプロジェクトの活動



ジュネレーティング、ポンプトレーニングなどを実施した。また、JVC撤退の年である1990年には、従来JVCプロジェクトの対象になっていなかった遊牧しかできない人々に対し、家畜銀行のプロジェクトも開始した。

JVC 撤退

1983年のプロジェクト開始当初から、どこまでJVCは活動を継続するかは懸案であった。少なくとも3年は続けるというのが当初のスタッフの漠然とした目標であった。農業をやる限りは難民が実際に農場からの収穫物で食べていけるようになることを見るまで続けたかったのである。現場で難民と日々接しているスタッフにとっては、毎日が困難と新たな発見との連続であり、最貧国の一つであるソマリアにはここまでやればいい、と線を引くことは難しいことであった。

この現場の気持ちと、ずるずると活動を継続することに反対する東京本部との意識のずれは、しばしば両者の対立となって現れた。しかし、タイ・カン

ボジア国境のサイト2からの撤退にも刺激され、難民に長期的に関わることは問題だとの認識から、1990年末までにソマリアにおける現行の難民に対する全プロジェクトの終了を決定した。ただし、現地日本人スタッフの強い希望もあり、ソマリアでの長い経験と蓄積を生かした、ソマリアの地元民へのプロジェクトへの新たな展開を模索して調査を開始した。しかし、1989年末から激しくなってきた部族対立に基づく内戦が急速に悪化し、1990年末JVCはソマリアから完全に撤退することになった。

1983年から7年半にわたるソマリアでの活動では、ソマリア国内の8つの難民キャンプを対象に以上のように、農業、植林、教育、保健医療、職業訓練、村作りなど多彩なプロジェクトを実施した。中心となる農業では3地域に合計35の農場（552ヘクタール）を建設した。その間、43人の外国人スタッフ、ボランティア（スウェーデン人1人、日系アメリカ人1人、残りは日本人）、約40人のソマリア人スタッフ、約100人のソマリア人労働者がプロジェクトに携わった。

国際戦略にからめ取られたソマリアの難民問題

磯田厚子

1970年代後半、オガデン戦争によって大量の難民がエチオピアからソマリアへ流出した時、世界は大きく注目した。人数の多さとともに、エチオピアに軍事援助したソ連から西側へ寝返ったソマリアへの注目でもあった。これ以後ソマリアへの国際援助は倍増し、多額の難民援助が展開された。JVCも UNHCR 経由で日本政府からの財政支援を受け、ソマリアへ入って行った。だが年月を経ても、難民援助として行っている中に、多くの矛盾が見えてきた。何事にも矛盾はあるにせよ、ソマリアでの難民援助には根本的な矛盾が感じられる。10年以上続けられた難民援助は何だったのか、難民流出と援助開始を取り巻く外側の情勢を振り返って考えてみたい。

エチオピア側へ再び出たのは難民か

全くイタチごっこだ。いや狐と狸とさと言えるか。UNHCRが、1990年末からのソマリア内戦でエチオピアに脱出したソマリア人、エチオピア人推定120万人への支援を国際的に訴えたと、今年3月に新聞で読んだ時、正直言ってしらけた。ソマリア人もUNHCRも、難民という存在を利用しているに過ぎないと思えてしまう。

かつてオガデン戦争でソマリア側へ来、難民として支援を受けていた人々が戻ったに過ぎないではないか。一種の難民の解決だ。それを再び難民に仕立てようというのか。遊牧民の彼らにとって、この辺の土地は元来行ったり来たりする所。難民という概念には当てはまらない。「何もくれないなら帰ってやるぞ」と言った難民の顔を思い出す。UNHCRはとくに承知している事のはずだ。

いま彼らに、(現状を見ていないので違うかも知れないが)いわゆる「難民」としての支援が必要と思えないのだ。彼らの帰るエチオピアの村々への支援の方がずっと意義がある。ソマリアの難民問題の解決が真剣に目指されているとは思えない。

民族分断が引き起こした難民流出

難民流出の原因であるオガデン戦争は、ベルリン会議などのアフリカ分割に端を発する。ことにソマリア北部は1869年のスエズ運河開通以来、紅海の覇権を狙う欧州列強やアフリカの独立国エチオピアの侵略にさらされてきた。ソマリアの族長たちが、隣国エチオピアの脅威のために締結した1888・89年の英・仏・伊との保護協定は、分割占領を許したに過ぎなかった。戦略的にエチオピアとの友好を望んだ

列強は、エチオピアのソマリア内陸領有の協定を結ぶ。こうして1898年にソマリア人の居住地域は、エチオピア領オガデン地域、英領、伊領、仏領(現ジブチ)、ケニア側英領に五分割されてしまった。

第二次大戦後、ソマリ民族統合の構想は国際社会の同意を得られず、旧保護領境界を暫定的統合ラインとしたまま、1950年から10年間信託統治となり、オガデン地域はエチオピアへ譲渡された。独立の前には統合独立を求めて、国連や諸外国に働きかけたが支援を得られず、結局1960年に英領と伊領が各々独立の後に合併。ソマリア共和国(後に民主共和国)となった。

幾度も解放運動が繰り返され、大(あるいは汎)ソマリ主義に立つ失地回復・民族統合が、ソマリア人の悲願となったが、いまだに達成されないままだ。

東西大国の軍事介入

くすぶり続けたオガデン地域の解放運動は、1974年のエチオピア革命を機に、その不安定政権を突くように再び活発化した。ソマリアに支援されていた西ソマリア解放戦線、ソマリ・アボ解放戦線が1977年5月エチオピアで武装蜂起。同7月ソマリア正規軍が参戦し、オガデン戦争に発展した。

また革命後社会主義路線をとるエチオピアは、友好国米国と疎遠になりソ連に接近。中東戦略で紅海・ペルシャ湾包囲網構想を持つソ連は、77年にエチオピアへの軍事援助を開始した。一方ソマリアも1969年の革命以来ソ連と友好条約を結び、紅海の出口ベルベラ、南のキスマイヨに基地提供したが、宿敵支援を始めたソ連を嫌って、戦争さなかの77年11月に条約を破棄した。

図1 ソマリア人居住地域とその分割



(財)国際協力推進協会；ソマリアの経済社会の現状、1985

ソマリアのソ連離反は、西側諸国の関心と呼んだ。同じく中東戦略を練る米国・西独・中国は武器支援を示唆。だが領土紛争支援は、「独立時の国境線不変更」を1964年に確認したOAU加盟アフリカ諸国の反発を招く恐れがあった。同時にその頃問題となった南部アフリカへの関心を持つ米国は、オガデン地域でのソ連の行動に目をつぶるが、ローデシアには手を出すなどの密約をソ連と交わしていたという噂もあった。結局米国は、ソマリア政府軍のオガデンへの越境を理由に、軍事援助から手を引いた。

こうしてソ連、キューバ、南イエメン（合併前）が参戦した78年初めのハラルでの大戦闘で、孤立無援のソマリア軍は大敗し、3月撤退を宣言した。列強が原因を作ったソマリアの領土問題は、再び大国の国際戦略に翻弄され、解決から程遠いまとなった。

西側による素早い援助開始

ソマリアの領土紛争には冷やかだった西側列強は、戦後の難民援助には素早い対応を見せた。

1978年に戦闘はほぼ終息したのだが、エチオピアから難民が78～80年に多数流入し、79年1月ソマリア政府は難民援助を国連に抑いだ。UNHCRの調査団が派遣され、1979年緊急援助を、80年に大規模援助が開始された。難民は79年7月には7万だったのが9月に38万、80年2月60万人と増加（ソマリア政府発表）。80年3月国連事務総長による出資国への資金呼掛け、81年1月の国連諸機関による再調査団派遣等、援助への動きが活発になる。UNHCR・WFPは以後毎計1億ドル前後（約200億円）を援助し続け

た。

難民援助のみならず、西側諸国（特に米・伊・西独）及び国連の援助は80年以降激増した。80年の国連とDAC諸国からの援助総額4億5000万ドル（当時のレートで約1300億円）は同年中央政府歳出の9割にも相当したという。米国は80年8月軍事援助を開始し、ソ連の後を受けて北部ベルベラに海軍基地開設。その見返りに4000万ドルの援助を補償した。

対ソ戦略としての大量難民援助

西側、特に米国がいち早く援助に乗り出したのには大きな理由があったという。

オガデン戦争鎮静直後、1979～80年に中東に大異変があった。79年2月イラン革命勃発。ペルシャ湾を守る親米国が反米国に一転。第二次石油ショックの引金となる。次いで同年12月。ソ連がアフガニスタンへ侵攻。インド、アフガン、イラク、シリア、南イエメン、エチオピアの親ソ連国による中東要衝包囲網が築かれたと、西側は緊迫した。

明けて80年1月、カーター大統領は石油防衛、ペルシャ湾死守の、カーター・ドクトリンを発表。米国内での緊急展開部隊の創設とともに、中東近隣諸国への軍事基地開設が提案された。即ちバーレーン、オーマン、ソマリア、ケニアにである。

素早いソマリア支援には、単なる人道的理由と言うよりも、このような時代の背景と大きな世界戦略があったと見るべきだろう。

80年になってなぜ難民は増加したのか

経過を振り返ったときもう一つ疑問になるのは、難民流入が、戦闘終了後になってなぜ激増したのかだ。JVCのスタッフや農民にも、戦闘開始と聞いて77年に早々身内を頼って出た人もいる。いつ何人出たか確かな数字は無い。先の数はソマリア政府が国際的に訴え、UNHCRが入り始めた時の報告だ。

いくつか原因は考え得る。解放軍として戦った兵士は、敗北後エチオピア人による報復を恐れ逃げこんだ。また78年以降もゲリラ戦は続き、エチオピア軍による略奪や殺戮が頻発し、その噂が人々を駆り立てたとも言う。ソマリア政府軍撤退も、人々には、戦闘終了と言うより守りがなくなったと映ったらしい。実際の話を知ると、戦火の中を避難して来たというのは少ない。一部ソマリア人の中では、襲撃があるぞとソマリア政府があおったとの噂もある。

UNHCR80年報告書では、干ばつ、翌年の大雨と

洪水も難民流入の原因とされている。

私には、UNHCRの調査・援助開始の79年後半からの激増と見える。大半が被災民だが、援助がなかったらこれ程の流入はあったらどうか。首都で職に就いていた人も援助開始で、職を辞め国境近くのキャンプへ援助を貰いに流れ込んだ。そして、10年以上の援助依存の生活が続いたのである。

自立への解決と逆行する難民援助

こういう形の難民援助が本当に必要だったのだろうか？ 職を得ていた人々を引き寄せたことは、自立に向かうべき難民援助とは逆行する。難民キャンプは、自然も経済もとりわけ脆弱な辺地にあり、難民人口を吸収する職の機会も、自活の農地もごく限られ、そこでの多人数の経済自立は困難だ。必然的に人々をキャンプに縛ることになる。首都をはじめ周辺に散ってなんとか生計を立てていた家族もあった事実は、むしろソマリア国内全般、ないしはオガデン地区への開発援助の方が問題解決につながっただろうことを示唆する。いずれにしても、大量援助のほしかったソマリア政府と、ソマリアを味方に付けたかった西側諸国が、どれ程真剣にソマリアの将来の安定的生活を考えたのか、内戦の混乱にある今こそ、問われねばならないと思う。

本誌106号14～15頁にも書いたが、この大量援助が、オガデン戦争敗北時からくすぶっていた氏・部族対立に拍車をかけた。援助が国家の崩壊すら招いたともいえる。

解決を見ないままの援助終了計画

1988年以降、UNHCRのソマリアの難民援助額が従来の6割、3000万ドル前後に減額された。加えて、同年10月、UNHCRは難民問題の恒久的解決の時期が来たとし、1年半以内に大半を本国帰還させて援助を終了させると提案した。5月にエチオピア・ソマリアが和平停戦したことによる。長期化したキャンプ生活と難民援助の解消は、もちろん今さら遅いぐらいである。しかし、今まで国内定住のための農業プロジェクトを支援してきたのを、もう農業はいから皆帰れという、突然の方針変更である。こころろ変えられては長期的な計画が立てられない。UNHCRから離れたNGOも多かった。この撤退案はこの年の東西冷戦構造緩和・軍備縮小との偶然の一致とは思えないのである。

難民流出は国境問題に対するソマリア人の主張

こうして考えてみると、難民流出は既存の「国境」を前提とする西側の難民の概念に対する、彼らのあざけりの主張とも見える。

国境線へのソマリア人の主張が、国際的に同情されながらも認められず、独立後30年経った。国際社会は、根本解決になる国境線の変更を認めず、難民は認めると言う。彼らにすれば、まじめに問題解決を計るつもりがないと見るだろう。それなら自分たちの土地であるどちら側にも行って、難民援助を得て何が悪い、と思うに違いない。ソマリアの難民問題は、東西大国の中東経済安保戦略の思惑、援助合戦の真只中からめ取られたに過ぎなかったとも言えよう。

初めにイタチごっこと思ったのは、難民援助によって難民問題の解決になると勘違いした、楽観主義の表層的見方のためか。よくよく調べると、そもそも難民援助は、全く別次元の国際戦略に沿って開始された性格が強い。はなからソマリアの問題解決を目指しているのではなかった。ソマリア人に侮られる根拠もあるというものだ。

JVCは何だったのか？

これまで人の事を何のかのと言って来たが、ではこのこ出て行ったJVCは何だったのか。

タイでの難民活動経験のあったJVCは、当時、団体として転機にあった。他の国へ活動を展開しない限り、資金的にも活動経験としても一回り大きくなれないという切羽つまった状況にあったと聞いている。いわば内部的な強い動因に押されて、経験ある難民援助なら何とかやれるかとソマリアに関わった。困難を抱えている難民を何とか支援しようという程度の思いだった。

だが、ソマリア難民との触れ合いの中で、以上見てきたような疑問や彼らの問題が見えてきた。誰をどう支援するのか、こういう構造的問題のからみの中できちんと見据えないと方向を見失うことを、この8年にわたる活動でやっと思い知らされたということだ。今後この経験をどう生かすかが問われている。

注) UNHCR：国連難民高等弁務官事務局

WFP：国連世界食糧計画

OAU：アフリカ統一機構

DAC：開発援助委員会(OECDの下部組織)

OECD：経済協力開発機構(西側先進諸国の機関)

どのようにして 家畜プロジェクトは 始まったのか

船川秀夫

ダヘル暮らし

彼に私が初めて会ったのは、ソマリア3年目の時だった。それまでのソマリア南西部のルーク暮らしから中部のジャラクシへと移ったところだった。

名前はダヘル。推定25歳。家族はいない。オガデン戦争で失ったのだった。ダヘルはUNHCRからは難民として認められていない。つまり食糧配給カードを持っていないのだ。全てを自分一人の力でまかなわなければならない。仕事は一輪車を使った運送業だ。食糧配給日に配給所で客を待つ。客がないと彼はその日食事無し。一輪車は借り物、家も借家だ。難民キャンプがあるおかげで彼の生活が成り立っている。

難民再登録と家畜プロジェクト

まず、カードを持たない元遊牧民を対象者としてジャラクシ地区の10家族を第1グループとした。この10家族にそれぞれ10頭（山羊と羊）を貸し、子供が生まれたら親をJVCを通して第2グループへ引き渡すというのが、このプロジェクトの概要である。この10頭の子供を元にして難民になる以前の生活を取り戻す基礎にすることが目的であった。

このプロジェクトが始まるきっかけは、UNHCRによって行われた難民の再登録だった。ここではカードを持つ難民だけを対象に、エチオピアに帰るかソマリア定住か二者択一を迫った。しかしこれは本質的な解決を目指すものではなく、難民というステータスをなくすためにカードを買い取り、現金を支給するだけであった。10年以上も援助を続け、疲れはてたUNHCRが提案した窮余の難民問題解決法である。それではカードを持たない、難民キャンプに依存せざるを得ない人々はどうなるのか。

難民だけど難民じゃない

難民キャンプの一角にはダヘルのような人々が住

んでいるところがある。彼らの生活はキャンプ無しには考えられない。ほとんどが少数民族出身で社会的にも差別されている。生活を取り戻すような努力をしようにも機会さえ奪われていた。

そんな彼らが立ち上がった。難民キャンプを無くそうとするUNHCRにNOと言い、自分たちの力で立とうとした。JVCとカードを持たない難民で新しいプロジェクトを始めたのだ。すでにソマリア国内の治安が悪くなり始めていたが、彼らの熱意にはそれさえも忘れさせる力があつた。第1グループは私の予想を上回る結束力を持ち、第2グループへの移譲に成功した。それまで援助を受ける機会さえなかったにもかかわらず、次の人たちへ機会を譲ったのである。

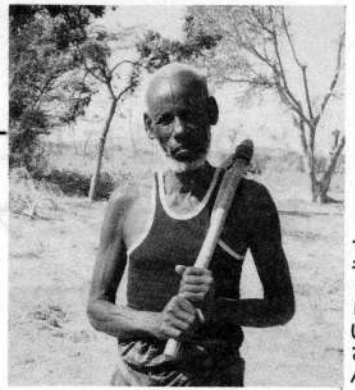
難民キャンプという壊されてしまった社会の中で、これまで誰の力も借りずに生きてきた人々。彼らにはすでに依存体質は見られない。新しい自らのコミュニティを作ろうとしているのだ。

誰と手をつなぐのか

元遊牧民、彼らはその保守性により積極的にNGOのプロジェクトと関わりを持つことが難しかった。サヘル地域の牧畜プロジェクトはNGO、政府を問わず、ことごとく失敗に終わっているという。多くの場合、こちら側の価値観（例えば経済効率であるとか、経営方法など）でプロジェクトを進めようとして失敗に至る。もちろん相手側政府の強い要請によってそれらがよいことであるとされ、無理な方法で進められることが多かったのも事実である。

動物が子供を産むのにはある一定の期間が必要である。植物も収穫時期を変えることができてその成長の過程は変えられない。工業のように、早く機械を回せば、同じ時間により多く生産できるというものではない。今、「拝金主義」と呼ぶような状態が席卷している。それは日本人もソマリア人も難民も同じだ。

1990年12月半ば、JVCソマリアは内戦の激化にともない撤退した。残念ながら、このプロジェクトの行方を見届けることができなくなってしまった。しかし、このプロジェクトの対象者たちの遊牧生活を取り戻そうという努力に、金儲けのためのプロジェクト参加でない彼らの姿に、いちろの希望を見いだしている。金の魔力に負けない生活を作ろうとする人たちと結ぶことが大きな目標ではないか。



マモーじいさん

JVC農場の農民たち(元難民)

JVCは当初、無償でポンプを農民に供給していたが、彼らの自立心を損なうのではないかと懸念から、農民がポンプ代金をローンで返済する方法に変更した。ローンの返済期限が過ぎると、最初にちゃんと約束してあったのに、決まってJVCと農民の間でちょうちょうはっしの渡り合いが始まる。

「JVCには、本当に感謝している。何も収入のなかった我々がここまでやれるようになったのも、すべてJVCのおかげだ。10年間もの間、何の目標もなく生きてきたが、それを覚えてくれたのもJVCのプロジェクトだ。しかし、この件(ローンの返済)に関しては納得できない。それではまるでサルの母親が子供を背中におんぶするのと同じだ。JVCは我々にとって母親なのだから、そんなことをしてはいけない。どうか考え直してくれ」(普通サルは子供を腹に抱いて移動するが、背中に背負うと子供はもろに直射日光にさらされてしまうことから。ソマリアでは辛い目に合わせる例え話)

時には、「わしらがいるからJVCがここにいられるんだ。何もくれないのなら、エチオピアに帰ってやるぞ」とJVCを脅す? 難民もいる。

ハルバ地区でグループファーマリングを始めた農民

やがて、がんばろうとする人々も現れてくる。

「キャンプにいと子供はモラルがなくなっていく。だからわしらはキャンプを出たのだ。これまで家族(大家族)がバラバラに住むしかなかったが、今は皆いっしょに住めるようになった。一番うれしいのは、食糧配給を待たなくて良いことだ。いつ来るとも分からないのを待つほど辛いことはない。しかし、今は自分たちが努力すれば良いのだ。これから先も政情不安の中で将来どうなるか分からないが、できる限りこの地で生きて行くつもりだ。インシアラーさ」

マガネイの地元民であるマモーじいさん

地主のひとりであり、第二農場の農民でもあるマモーじいさんが、内戦と部族対立により放棄された農場を前にして語ってくれた。

「難民が来てからトラブル続きで、良いことなどなんにもなかった。昔はこの辺りは一面のブッシュで、薪をとるのも楽しかったし、ヤギやヒツジもそこいらで放し飼いにしていたものさ。それが難民が大勢やって来てからは、やたらに木を切るの、わしらは遠くまで薪を取りに行かなければならないし、ヤギに草や木の芽を食わせるためには、1日ばかりで出かけなければならなくなってしまった。それほどやつらには苦勞させられたのに、国連や外国の援助はいつでも難民だけが対象さ。わしら元からここに住んでいた者には、恩恵はほとんどなかったというわけさ」

「わしらはあんたらが来るずっと前から半農半牧で農業をやとった。その頃は雨が降ったら、川辺りの土地に棒で穴を開けてメイズを蒔き、うまく雨が降り続けてくれれば収穫できるというものだった。けれども、頼みの雨も年々減ってきて、将来に対しては漠然と不安があったなあ。

JVCはわしらにポンプを使って川から水を揚げて農業を行う方法を教えてくれた。なにしろジュバ川は乾期にも涸れることはないからな。今までは、川の水を利用しようとは考えとらんかった。他にも、木を植えること、果樹を育てること、いろいろな作物を作ること、豆を間作することなどいろいろ教えてくれた。今は難民のやつらがいつ襲って来るか分からんからポンプを自分の家に隠してあるが、やつらがここからいなくなったら、ポンプを運んで来てまた農業をやるさ」

ローカルスタッフとは何なのか？

磯田厚子

ソマリアで働くのは実に面白いが、同時にシンドかった。シンドいのは気候のせいばかりではない。ソマリア人スタッフと働くこと自体がキツイのだ。文化・常識が違う。と同時にローカルスタッフとはどんな存在なのかと考えさせられた。

管理者の発想になりそうな自分に愕然^{がく}

昼近く、町へ出ていたスタッフが戻るなり「会いに行ったS氏が捕まらず、4時に会う」と言い出す。私の着任1カ月で3回目だ。夕方は緊急以外は車を出さないの知っていて約束してきたのだ。彼は「約束破りは失礼だ」と引き下がらない。まだ勤務時間なのだから、今から行って明日に変えるよう言う、「仕事なのに何がいけない。磯田はのぼせと言うのか」と怒りだす。“明日出来ることを今日するな”日頃のモットーの彼だ。こちらムカッと来て「S氏に会えずに朝から3時間以上も町にいたってわけ」となる。

ここで「本当にS氏に会うの？」などと聞こうものなら、「俺が嘘付きだと言うのか」と狂わんばかりに叫びだす。イスラム教徒に嘘付きと言うのは不信心者と言うのに等しい。会うか否かの話が「嘘付きと言った」にすり替わる。疲れる。

要するに、彼は夕方車を使いたいのである。S氏に会うか分からない。いろいろ想像が巡る。私だって疑いたくない。が全く予定外の所で出くわしたり、彼だけでなく前例が多々ある。言うことを信じろといわれても、もう疑心暗鬼の塊になっている自分が見える。

外国団体スタッフという社会的ステータス

車の使用など管理者的な枝葉末節の事ともいえる。しかし、何か本質の問題点に触れるごだわりを感じるのだ。なぜ多くの、特に責任の重いスタッフほど偽ってまで車の使用を要求するのか。

彼らは車で地元役人や親族の私用を手伝うが、誰にでもではなく有力者に限る。ムスレムとしての相互扶助は建前で、実は自分の顔売りを、後の見返りを期待しているのが見え見えだ。

こうなると管理の問題ではなくJVCの活動ポリシーにかかわる。一種の贈賄であり、また農民との関

係だと収賄にもなる。JVCは社会関係作りに利用される団体と化したのか。公私混同は知位ある人の徳の一つと考える社会にあっては、事の是非を言うのは難しい。だが少なくとも、彼らが「地位ある」存在となっているのをどう考えたらいいのだろう。

考えてみれば、スタッフ8人中5人までが他の外国団体から移った人で、複数団体の経験者もいる。一般給与が20～30ドル相当のところ、70～100ドルと高給で車も使用出来、待遇がいい。これを当てにし、職の無い身内が身を寄せる。結局援助団体を渡り歩く給与生活から抜けられない。自活の技術を持っていても今更の肉体労働や不定期の収入を嫌い、給与生活から離れられない。役人同様結局は、援助にしがみつ়く階層を作ったという事か。

外国のNGOが去った後に残るもの

願わくはJVCが去った後、彼らが地元のNGOを作るなり、自ら実践する農民になる、等を期待し、水も向けた。が、援助なしにやるとは言わなかった。

日頃の活動では、日本人スタッフとほぼ対等にプロジェクトの方針を話し合い、決定に加わってきた。6～7年もJVCで働き、2～3年ごとに替わる日本人よりプロジェクトを知っていると彼ら自身思っていた。しかし現実には、外国団体とは物を出来るだけ沢山引き出す金づる、という一般的認識から抜け出し難い。理解はしても周囲の認識に引っ張られ貫けない。NGOには成り難い条件に絡められている。

外国団体からソマリア人に引継がれた民間団体が無いわけではない。話の出来る代表もいた。違いは、我々の活動やスタッフとの関係のあり方の長年の反映だと、謙虚に受け止めねばいけない。同時に、スタッフ自身の生きる姿勢も大事な要素だ。

だが外国団体が去った後、引き継ぐNGOなど残る必要はあるのか。活気ある村や、知恵と自信のある人々が残ればいい。本来、プロジェクトがうまくいけば、スタッフはその地域や生活が羨ましくなるはずだ。スタッフ教育は重要といわれ、責任移譲・海外研修など推奨されている。が、そのエネルギー・お金はプロジェクトに向けた方がいいのではない。言うは易く、現実には複雑だ。実際の対応を考えると、まだまだ考えが揺れている。

JVCはソマリアプロジェクトから何を学んだか？

1991年3月5日、ソマリアプロジェクトを起こした柴田久史（調整員 '83.3-'85.1）、中期に参加し最後の東京担当でもあった山口誠史（会計及び植林担当 '85.3-'86.12）、ソマリアからの撤退に立ち会った磯田厚子（現地代表 '88.9-'90.12）、船川秀夫（農業技術者 '86.6-'90.12）の4人が、JVCの7年半の活動を振り返り、私たちはこの活動から何を学んだのかを討論した。以下はその討論の要旨をまとめたものである。

難民に関わることの意義

ソマリアのプロジェクトは、生産手段を持たない難民に対し農業を指導し、自立の道を開くことを目的としていた。彼らとともにソマリアの乾燥した大地に緑をよみがえらせ、農場でできた作物で食べていけるようになること、それが私たちの願いであった。しかしこの目的は、最初から自己矛盾を抱えていたことに後で思い知らされたのである。

結論からいうと、難民に対しての援助は、彼らが戦火や圧迫を避け着の身着のままで逃れてきた直後の緊急救援は意味があるが、難民に長期的に関わることはかえって難民の状況を固定化し、問題の解決を遅らせる結果にさえなるということである。

これは、難民キャンプに近く、また遊牧を背景に持つ難民が多いマガネイ地区の農場が結局うまくいかなかったことにも現れている（本誌別稿）。多くの難民は、キャンプで一応生活が充足されていたために、積極的に自分の生活を切り開こうとしなかったのだ。このような難民の長期的固定化状況に対する疑問は、ここソマリアだけでなくタイ-カンボジア国境でもJVCは経験したことである。

難民を対象に、農業や植林を行うことは本来無理があったとも言える。難民とはやがて本国に帰る人々であり、その土地に住む人々でなければ、本気で生活を改善しようという気にはならないからである。私たちは国連の方針に逆らって、当初から難民だけを対象とするのではなく、地元民も加えてプロジェクトを進めてきた。最終的に国連もこの方針を採用することになるのであるが、さらに私たちは、難民に地元民を多少加えても不十分で、逆に地元民の中に難民を取り込み地元を変えていくことにより、難民をその中に吸収し、問題を根本的に解決することにつながるかと考えるようになった。難民という存在、

また難民キャンプという構造そのものが普通ではなかったのだ。

難民を受け入れたソマリアで農業に取り組んでいた私たちは、この地の自然条件の中でどうやって人々が自給的な生活ができるかを模索したが、その過程で問題の解決のためには難民という枠では捉えられないことを実感したのである。（ただしこの辺の事情は、ソマリアの難民問題は同じ民族が流入したために、地元民と難民の統合が可能であるという条件があるが、タイのカンボジア難民キャンプのように異民族の閉鎖されたキャンプでは不可能である）

自ら立ち上がろうとする人々と結ぶ

農業プロジェクトは当初、JVCが土地交渉から整地、水路建設までを行い、無償のポンプを設置してその後難民キャンプから農民を選抜し、彼らに技術的な指導を行うという方法を取った。しかし、この方法ではJVCから一方的に与える部分が余りにも多すぎ、何でも要求すればJVCはくれるという意識と依存心を農民に植え付けてしまった。この反省により、後期からは「グループファーマーリング」方式に移行していったのである。

この過程で、一部のスタッフからは、この方式では農業を良く知っているものしかJVCのプロジェクトの対象にならないとの懸念が出された。確かに7年半の活動期間を通して、JVCのプロジェクトからほとんど切り離されていた人々がいたことも事実だ。しかし、JVCの活動が社会全体を対象とするほど大きなものでないからこそ、地域で核となる人々を見つけてその人たちと協力して、一種のモデルケースを作り上げていくことが重要なのである。

ソマリアの場合は農業を切り口に、グループファーマーリングという形で自ら立ち上がろうという人々と



結ぶことによって、社会変革の核となることを目指したわけである。実際に村作りが始まってJVCもコミュニティサービスを実施してきたが、プロジェクトを継続していった場合はこのコミュニティサービスを充実させることにより、女性や障害者にも対象を広げていくことも可能であった。また、撤退直前に始まった家畜銀行などによって、農業以外の対象者もターゲットにできるようになっていただろう。

言葉を変えると、その人がどんな状況にあるのが問題なのではなく、どんな姿勢でいるのかを問題にしていこうということである。ずっと助け続けていこうとするならば、悲惨な境遇にある人から助ければよい。しかし、その社会全体をよくしようとしたら、立ち上がっている人々とつなぎ、その内在的な力を引き出すことに協力するというのが、外からきた人間ができることである。

異文化との出会い

ソマリアに関わったJVCのメンバーが一様に口にするのが、ソマリア社会との葛藤である。イスラム教徒であり、遊牧民であるソマリアの人々（難民もソマリ族である）とのあまりにも違う考え方、感じ方に誰もが戸惑い腹を立て、時にはけんかをしていった。海外での生活が初めての者はもちろん、タイでの活動を経験した者でも同じように異文化との葛

藤を経験した。「アジアならばまだ自分たちの価値観を通すことができるが、アフリカではそれが通らない」。あるスタッフの正直な感想である。

異文化と出会うということは、自分の立っている基盤を疑うことだと言い替えることもできる。日本にいて、だいたい同じ考え方をする人々に囲まれて生活していると、自分の生活や考え方が人類不変の価値観のように錯覚してしまう。ところがそれがソマリアで全く違う見方があることを知ると、自分の発想が現在の日本の生活環境に養われ、その中でのみ通用することであったことを思い知らされる。例えば、何かと顔を出し口を出すソマリア人の性格にへきえきしながら、アパートの隣の住人と全く顔を合わせないで生活していることに何の疑問も持たない自分をそこに発見することでもある。

このことはプロジェクトを進める上でも大きな意味を持つ。日本人は何とかして砂漠に緑を甦えらせ、農場で食べるものが自給できるようにとがんばる。ところが、遊牧を背景にする農民の中には、ある程度農場に作物ができて緑になると、家畜を連れてきてせっかくでかかった作物を食べさせてしまう者がいる。また、ある者はあと半月もすれば収穫できるというトウモロコシを刈り取ってしまった。聞けば、茎を町に持って行って売ると家畜の餌として高く売れるからという。これはもう、遊牧生活を数百年続けてきた人々の生活に染み着いた価値観であり、

トウモロコシの茎は高く売れる



ただか2,3年留まっているだけの外国人がどうこう指図できる問題ではないのであろう。

この他、例を挙げればきりが無い。このような異文化との出会いは、すべての日本人スタッフが数え切れないほど体験したのである。これらのことから私たちは、自分たちと全く違う価値観がこの世に存在していることを、まず知ったのである。そして、自らの価値観を一方的に相手に押し付けることの危険さを学んだ。さらに、彼らの考え方を学ぶことによって、自分の価値観をもう一度問い直すことも学んだのである。

では、彼らにとって異文化である私たちJVCとの出会いは何だったのだろうか。いろいろな人間がとっかえひっかえやってきては、若造のくせに偉そうなことをいう。まあ、もらえる物だけもらっておこうか。そんなところかもしれない。中には自分の生活を変えていこうと考え始めた者もいたかもしれない。ただし、日本人とはスピードが違うかもしれない。

遊牧をずっとやってきた人々がそう簡単には変わらないと思う。しかし、農業というものを知って、計画を立てることだとか、がんばればがんばるほど成果が上がることを知った者もいるだろう。何しろ、遊牧ではどんなに家畜のお腹をさすっても生まれてくる子供の数は変わらないのであるから。それこそインシアラー（アラーの思召しのままに）である。

適正技術とは？

その地にあった技術、現地で入手できる材料を使い、現地の人々で維持管理できる技術のことを適正技術という。第三世界の開発に関わる時に真っ先にあげるポイントの一つである。では、JVCはソマリアで適正技術を実施しえたのだろうか。

試みとして、奄美大島に伝わる砂糖絞り機（砂糖きびを牛に引かせて絞る）や中田正一先生が実験した水車や風車（ディーゼルポンプに代わる揚水手段）

水車も試みたが…



などもルークの農場で実験してみた。どれもうまくいかなかった。ルーク地区のような乾燥地で農業をすること自体適正とは言えないのではないか。だいたい、難民に対する農業指導という目的が本来適切ではなかった、などなど。とはいえ、砂漠地であったから灌漑農業を実施したのではなく、難民がそこにいたから農業を実施したのであり、その点では最初から矛盾を抱えていた。

ただ、私たちが実感したのは、たぶん適正技術とは生活の仕方とか価値観に基づいているものだろうということである。生活と関係なく外から持ってきて導入しようとしても根付くことはない。ただし、彼らの中の合理性にかなうものならば、受け入れられ引き継がれて行くかもしれない。難民が故郷に帰るとき、野菜の種を盗んでポケットに入れて帰ったり、また向こうで農場に木を植える者がいれば、JVCの方法の内の一つは適正であったと言えるだろう。また、ハルバ地区の農民の何人かは、これからもあの地で農業を続けていくことだろう。ポンプ保守のトレーニングにより、灌漑をしながら、木を植え、果樹を育てる農業は、彼らのものとなっていたと信じている。

JVCは何を学んだか

ソマリアの農業プロジェクトの経験は、それ自体が今後どこか他の国で農業を実施するのにすぐに役立つとは言い難い。しかし、以上挙げたような、①難民に長期的には関わるべきではない、②自ら立ち上る人と結んでいく、③異文化を尊重する、④適正技術とは生活に根ざした技術である、などはどれもJVCの他のプロジェクトにも教訓となることである。実際、いくつかのことは他国のプロジェクトでも問題点として認識され教訓として残っている。

カンボジア国境のノンチャンの補助給食をやめる一方で、カンボジア国内、さらにラオス、ベトナムへとプロジェクトを展開していったのは、難民への



支援は問題の根本的解決には結び付かないとの教訓から決断されたものである。また、エチオピアのマーシャ村のプロジェクトは、それ自体が飢饉に強い村を作るモデルケースであったし、タイ農村部のパイ村長との協力は、近代的な商品作物栽培ではなく、伝統的な技術に基づいた複合的な農業により自立して生活していこうという人々と手を結ぶことによって、農村の自立と環境を守っていこうという試みである。

これらのプロジェクトは何もソマリアのプロジェクトの反省から出てきたものではない。それぞれが実際に問題に直面した中で導き出されてきた結論なのである。ソマリアでの教訓もそれら各プロジェクトと平行して得られた。従ってJVCにとっては、これらのことは第三世界で今後も人々と手を結んで行くためには普遍性のある教訓だといえる。

実際に、ここ数カ月新聞紙面を賑わし、JVC内でも激しい議論となった「湾岸問題」への対応に際しても、以上のような教訓は活かされているといえる。すなわち、当初からJVCはマスコミなどで「難民」と呼ばれていた人々（実際はイラク、クウェートで働いていて、母国に帰るために出国しようと逃げてきた外国人労働者）に対しての救援活動は始める意



志がないことを決めていた。外国人労働者以外のイラク人及びクウェート人の避難民に対してもほぼ同様であった。政府が自衛隊機による移送を計画し、それに対し民間で航空機を飛ばすための募金活動が高まりを見せた中でも、JVCは難民、または避難民という枠では今回の湾岸戦争に関わらない方針を立てていたのである。それは、湾岸問題の本質が難民に関わることで見えなくなってしまうのではないかと、この危惧があったからである。

それと同時に、ソマリアでの経験から、イスラムの論理は西欧のそれとも東洋のそれとも異なることを直感し、西欧的な国家主権や民主主義の概念が必ずしも絶対的な価値観としてアラブの人々に受け入れられないことも想像していた。

以上の、難民という切り口では湾岸に関わらない、イスラムの価値観は西欧とは同じでないという前提の下で、湾岸問題に対しては問題の本質であるイスラエル占領下のパレスチナの人々と、直接に爆撃の被害にあっているイラク国内の市民とを支援の対象として捉えたのであった。

JVCソマリアの経験は、それ以外の国でのプロジェクトの経験と併せて、このように湾岸に対する姿勢の中で活かされたのであった。（山口誠史）

みんなモハメッド

ソマリア人には、日本の山田さんや佐藤さんに当たる名字がない。あるのは名前だけ。一般的には、自分の名前の次にお父さんの名前をつけ、その次にさらにおじいさんの名前をつけて呼んでいる。例えば、アブドラヒ・モハメッド・エブラヒムという人は、アブドラヒが自分の名前、モハメッドがお父さん、エブラヒムがおじいさんの名前。本当はその後に、さらにひいおじいさん、そ

のまたお父さんというようにずっとつながっていて、彼らはそれを20代くらい前まで暗記している。したがって、2人のソマリア人が会って互いの名前を辿っていけば、14代前は兄弟だったなどと分かってしまう。ソマリア人の部族意識の強さはそんなところからもきているのかも知れない。名前の中では、イスラム教の創始者であるモハメッドがやはり人気がある。中にはモハメッド・アハメッド・モハメッドなどという人もいて、おじいさんまでの間にモハメッドがついている人は多い。口の悪い日本人は、ソマリアで石を投げれば、モハメッドに当たるなどと冗談を言う。

ソマリアのこと、難民のこと

——OBからのメッセージ

●ソマリアでのプロジェクトの意義はいったい何だったのか？ここ5年間、自問自答を繰り返してきました。そして、正直なところまだわかりませんというのが答えです。ただし、気にかかっていることがいくつかあります。そのうち2点だけを記します。

一つは、国としての体を成していないところ、つまり、まだ部族意識のレベルを脱していないところで、部族に対してでなく、国連の保護下で政府を窓口として、プロジェクトを始めたところに難があったのではないかと。もう一つは、ローカルスタッフのこと。彼らがいい仕事をしてまわりから認められている時に、官吏の道に渡りをつけるとか、もっと長期的に取り組んでいける他のプロジェクトに推薦するとか、やったことの見返りが将来なんらかの形で表れるようにしておくべきだったのではないかと。結局ローカルスタッフは、プロジェクト終了とともに7年前の無職状態に戻ってしまったわけです。もっともすべてが崩壊した今回の内乱により、今彼らがどこで何をしているのか知るよしもないのですが。

(税田芳三：'83.8～'86.4 現地代表)

●日本人スタッフとしての活動した私の中に——

異なる立場にある人間同士が友人になることの難しさ。

ソマリアの人々の中に——

「神が与えてくれた樹を切るだけでなく、人間が植えることも必要なんだろう」という自覚。

「自分たちとこんなにも異なる人々が世の中にいるのか」という実感。

自然環境に対して——

今はわからない。いずれ時が教えてくれる。

(鶴田三芳：'85.10～'86.10 チームリーダー)

●対立する部族同士が同じキャンプで生活圏を共有し、さらに、極めて限定された範囲ではあるが、JVC農場でたまたま隣の畑を割り当てられ、それまで、日常しゃべる言葉も違い、コミュニケーションもまったくなかった者同士が身ぶり手ぶりで農作業を通じて教え合い、時には一本の水路に水を確保するため、共同作業も行うなど、これまでの彼らにとっては初めての試みではなかったか？

今のエチオピアには、昔のように養える家畜もなく、

草地も充分あるとも思えないし、たぶん木も伐られているだろう。そのふるさとへいつの日にか帰れる時、遊牧で生計が成り立つとは考えにくい。

たぶん、大勢の人々が生きていくには、天水に頼るばかりでなく、小川の水を何等かの手段で汲み上げて畑を耕し、木を植えて風を防ぎ、土の流出から大地を守り、人々が憩い、燃料用にも活用できるという、彼らにとって新しい生き方を模索するヒントになったのかなあ。

(高橋一馬：'84.2～'86.3 農業技術者)

●汗のしたたった大きな笑顔

雨降らず、ポンプ不調

緑の林でおだやかに涼む家族

ケンカ、病気

再びもどった子どもたちの輝く瞳

不安な政治、そして未来

彼らの歩みは続く

それらをつつむ喜びの力

自立をサポートするための活動が蒔いた数々の種

一人ひとりの中に芽生える。私も歩み続ける。

(嶋 紀晶：'84.12～'88.3 現地代表)

●最後まで残っていた日本人、ソマリア人スタッフにご苦労様と言いたい。自分にとってソマリアの活動はいい勉強になった。ただ、グループファームの農民たちがこれからどうなるのか気になる。彼らが定住し、村を作っていて生活できるようになってくれればよいのだが。

(荻の迫善六：'85.10～'88.12 農業技術者)

●自動車を山ほど作って世界中へ送りだしているお金持の国、日本からやって来たJVC。それなのにポンプや資材を人々に貸し付ける。持てる者が持たぬ者に与えるのは当り前のソマリア。水が上から下に流れるのと同じくらい自然なこと。遠い所からはるばるやって来て、貸すんだから、必ず返せ、と言い張る。日本人とはなんとけったいな民族か。

そんな滑稽な私たちとしぶとく？我慢強く？つき合ったソマリアの人は、きっと何か今までと違ったきっかけを掴んだに相違ないと思うのですが。

(庄司 美：'86.4～'87.12 栄養士)

内戦下の危機

JVC 事務局長 林 達雄

2月6日付のタイの新聞に次のようなコラムが出ている。

日本は金持ちの国だ。湾岸問題で多国籍軍に90億ドルの追加支援するほどの大金持ちだ。そんなにお金があるのなら、本当に必要としている国エチオピアに、1億ドルか2億ドル贈ることを土下座しでもお願いしたい。

日本のニュースが湾岸一色で塗りつぶされていたころ、アジアの新聞はすでに、アフリカの飢饉を報じつつあった。エチオピア、スーダン、アンゴラなど、今アフリカ全土で約2000万人が飢饉に直面しているという。

生態系の破壊、干ばつ、砂漠化、人種差別、そして紛争。アフリカはこんなにも希望の持てない大陸だったのだろうか

アフリカは200万年前、人類誕生の舞台となった地域。独自の歴史と多様性を誇り、生命力への信頼を特徴とする地域であった。この地に陰を落としたのは、奴隷貿易、植民地支配に象徴される他地域からの介入だったことは確かだろう。16世紀以来、欧米、日本などの近代化と裏腹にアフリカはゆっくりと沈没してきた。1960年、アフリカの多くの国々が独立した。一筋の希望が見えたものの、1984年は飢饉の年となる。そして今、静かに終末をむかえようとしている。

1984年、エチオピア一国だけで100万人以上が餓死したといわれ、JVCの仮設病院の中だけでも500人以上の死者を看取った。この年から7年、事態はいつこうに好転しているようには思えない。10年に一度といわれていた干ばつは、2～3年に一度となり、今ではほぼ毎年となっている。森を失った大地はいつこうに蘇る気配を見せず、雨が多めに降れば洪水をひきおこし、貴重な表土を押し流してしまう。

こうした事態に対応しようとマーシャ村で始めた農村復興活動(1986年～89年)では、女性たちを中心に生活建て直しの動きが出てきて、希望のひとかけらを見出しつつあった。しかし89年秋、この地

域が内戦の渦中になったために引き上げざるをえなくなった。その後、89年の干ばつ被災民に対し、緊急食糧救援を行ったゴジャム州ピチュナからも、反政府軍の攻勢によりこの2月末にひきあげた。そして今、反政府勢力は首都アディスアベバから80kmの所まで迫っているという。

こうした事態はエチオピアに限ったことではない。他の世界の注目を浴びぬまま、アフリカ全体として状況は悪化しつつあるように見える。また、内戦が絡むからこそ、深刻で、状況が掴みづらく、対処もしづらい。内戦こそが今回のアフリカの危機の特徴の一つであり、人々の生活をより厳しくしている構造の一角なのである。

エチオピアでは分離独立や民主化を求める北部勢力と現政権との間の戦闘はすでに十数年におよぶ。国家予算の50%を越えるとも言われる軍事費、それにともなう重税、徴兵が人々の上のしかかってきた。徴兵は農村部において各村ごとに強制的に行われ、都市では酒場にたむろしている若者たちを人狩のように連れ去ったのだ。

内戦の責任がアフリカの人々にはないとはいわない。しかし、先進国に住む私たちとは無関係の事なのだろうか？ 戦闘の背景には、米ソ、アラブ、イスラエルなど様々な国の思惑があり、武器を生産販売する企業がある。また、中央から国全体を軍勢力をもって治めようというあり方は、ヨーロッパに支配されていた時代の悪しき遺産なのかもしれない。

内戦によりNGOsも撤退傾向にある。もともと、マスコミからの情報源が少ないうえに、NGOによる市民からの情報も届かなくなると、日本に住む私たちにとってアフリカはますます遠くなる。NGOは、飢えの問題に対してもっぱら人道的に対応すべきであり、内戦のように危険で政治的な問題に対しては、避けて通るべきなのであろうか。

どうもこの点乗り越えねば、今後アフリカに関わり続けることは難しそうだ。NGOとして真に問われるときである。(つづく)

ドライビングスクールの建設

カオイダン技術学校コーディネーター 井本勝幸

カンボジア難民のタイへの大量流出から12年目を迎えた今年、ここカオイダンの柵の中は、やはり12年という歳月がそうさせたのだろう、病院施設や保健、衛生、そして教育の分野まで実に様々な設備を備え、一つの都市としての機能を果たすに至っている。ここを訪れる人は皆、目を丸くするに相違ない。何故ならそれ以外にも、郵便局に託児所そして動物園まで存在するのだ。

援助の格差

さて、ここカオイダンでは今までの第三国定住の可能性はほとんど無くなり、タイ政府の意向もあり、その名称も「本国帰還のための職業技能訓練センター」と定められた。そしてカオイダンも含めた国境キャンプに滞留する約30万人の人々は、近い将来の政治的解決を待って、カンボジア本国へ帰ることを余儀なくされている。一方、平和的政治解決の未だ成されない現在、カンボジア国内は波尔・ポト政権の後遺症から復興しないまま内戦が激化し、不安定な状況の中で困りはてている人々が約800万人いるといわれている。それに対して国境キャンプは、タイ及び国際機関に保護されて暮らす人々が約30万人、特にカオイダンキャンプでは安定した状況の中であらゆるサービスを受けることができる。

この両者の間の大きなギャップを考える時、ここで教育プログラムを持つJVCとしては、当然のことながら葛藤と苦悩を強いられる。いったいこの国境で、種々ある教科それぞれを、どこまでやればよいのか。やりすぎはいけない。しかし、やらないわけにもいかない。

建設作業に活気づく

昨年度よりJVCは、プログラムとしてドライビングスクールを新設した。内容から見れば、それこそ国内との格差をさらに広げる様で疑問が残る。しかし、彼ら自身が積極的に、そして建設的に発言し働いたことの方に、自分は意味を見出している。難民キャンプでは社会参加する場がなく、物を生産する場もない。したがってこの建設作業で、キャンプは活気づいたのだ。ひいき目ではなく、この建設作業は昨年のカオイダンの最大行事だった。そこで子供たちは汗を流して働く親父の姿を見た。仕出しの食事に精を出す母の姿を見た。作業量が違えば食ってかかられ困った事もあった。意地悪もあったし、競争もあった。でもそれがとても人間的なそれだった。日本の山形から車が届くよと告げた日、うれしくてうれしくて涙が止まらなかった。

今の彼らに柵を越える自由は無い。けれども人間的な暮らしは柵の中でも作っていける。難民、難民と固定観念で見れば全体をつかめない。何のことはない、同じ人間なのだ。そして時間は流れていく。難民となって両親にくっついて逃れてきた子供たちは既に成人となり、カオイダンで生まれた子供が今年12歳の誕生日を迎える。遅かれ早かれやって来る本国帰還を経て、彼らはどのような巣立ちをするのだろうか。

彼らがここに留まっているのもそう長い時間ではない。僕は今カオイダンを、人間的な暮らしを模索する学舎として、考えている。



ドライビングスクール (左) と山形日産から贈られた教習用のブルーバード (右)

山形のNGOが一堂に会す

いつもは国境で、テキ屋の兄ちゃんのような格好の井本さんにしか会ったことのない私は、山形に現れた彼のピシッとした出で立ちを見て大変びっくりした。それでもまだ寒風吹く3月末の山形にはすぐ馴染んでくれた様子で、大変いい話をしてくれた。

今回は敢えてJVC報告会とせず、「地球市民の集い」とネーミングして開催した。それはこの機会に山形で活動している援助団体やボランティア団体が横のつながりを持つ場になればという意図を反映したものだ。午前中は井本さんの現場の臨場感あふれるリポートがあり、午後からは彼にオブザーバーとして参加してもらって山形の諸氏の活動報告が行われた。

とかく遠い世界のように思われがちなタイ・カンボジア国境と難民の人たちだが、井本さんのスライドを多用した話はその軽妙な言い回しと合いまって、会場の60人を越える聴衆に数多くの事を伝えた。その甲斐あってか、今も私のところには「スタディーツアーはいつ行われるのだ」という問い合わせが絶



山形での報告会を伝える『婦人やまがた』

えない。これからも、こういった現場の人を招いた報告会は推し進められるべきであろう。

午後からのセッションでは、10の団体が山形を基盤にしたその活動を報告した。県内の老人や障害者へのケアを始め、アフリカに樹を植える活動やアジアの子供たちへの里親として学費を負担する人々もいた。みな様に「山形にもこんな活動をしている人がいるのか」という驚きと感嘆の気持ちでこれを聴いた。そして改めて、地方都市でも何かが出来るということを胸の奥深くで確かめ合うことが出来たように思う。

私たちは地方の潜在力を信じてこれからも動き続けるつもりである。
(桑山紀彦)

井本夫妻を支える JVC九州ネットワーク

井本夫妻の九州報告会は、4月5日大宰府市（主催：大宰府市庶務課、人権の会）、4月6日福岡市（主催：JVC九州ネットワーク）で行われた。

大宰府では主婦を中心に20名が参加。前半はタイ料理の講習で、時間は限られていたがそこは主婦の技、ワイワイとそれらしきものを作り上げた。肉とミントのサラダが夏向きと好評であった。後半の報告会はスライドで様子が伝わったようだが、カンボジア和平の動きが伝わるなか、もう少し政情を交えて話が聞きたかったが、時間が足らず残念。これから民芸品販売などの協力もしていきたいとの声も上がって全体として楽しい会になった

福岡では、JVC会員、社会人等約30名が参加。報告（井本）と講演（星野昌子）のあと意見交換を行

った。現場報告の臨場感と合わせ、星野さんの自身自身のNGOへの目覚め、JVC誕生の経緯、海外の例を引きながらの地域に合ったNGO活動の紹介は大いに参加者を触発させた。参加人数が少なかったのは残念だったが、内容の充実した会となった。

今回、報告会の主催団体として名のりを上げた「JVC九州ネットワーク」は、今後九州でNGOに関心を持つ者で独自の活動を展開するための土台となるよう、しばらく残したいと思っている。当面は①井本通信、②井本支援のためのコーヒー杯募金、③タイ民芸品販売、④スタディーツアー、⑤報告・学習会、⑥JVCの情報提供、⑦会員交流を考えている。現在は安村周辺で細々始めた形ですが、九州・山口の方々、アイデアを出しあって一緒にやりましょう。関心のある方は、

〒818-01 大宰府市観世音寺93-4 GEOSCO 気付
JVC九州ネットワーク TEL 092-921-0696へ
最後に、報告会を手伝って下さったボランティアの方々、THANKS！
(安村 妙)

ビルマ難民、その後

本誌96号で「ビルマへの道」と題して、ビルマの問題を初めて取り上げてから1年がすぎた。

1988年、全土で大規模な民主化運動が高揚した後、民衆を武力弾圧したビルマ軍事政権。その下で、昨年5月に行われた総選挙を見守る形で、増え続けるカレン、モン、カレン族難民に対する緊急援助にJVCも加わってきた。神奈川県国際交流協会に特設されたビルマ難民救援委員会をはじめ、皆様から寄せられた募金88万円は、タイにおける難民援助を行うキリスト教系NGOの連合体・コンソーシアムを通じ、各難民委員会に食糧援助のために用いることができた。

しかし期待した選挙も、国民民主連盟（NLD）が圧勝したにもかかわらず、今日まで政権委譲がなされていない。そればかりか、ビルマ軍は弾圧をさらに強め、難民の数は約4万5000人と去年の2倍に達した。カンボジア、ラオス、ベトナム等タイ内の他の難民と違い、ビルマ難民に対してはタイ・ビルマの複雑な利害関係がからみ国連の援助が届かない。そんな難民キャンプが国境沿いに40もある。

民族の独立とは何か、そもそも国家というものは何のためにあるのだろうか…。国境に足を運ぶことにそんな疑問がわいてくる。タイの国境にはどこにも難民がいて、その向こうでは同国民同士の内戦が続いている。

カレン族難民委員会のリディアは、はっきりと私たちに向かってこう言った。「日本の援助が今の軍事政権を支えています。それが弾丸となって我々に向かってくるのです」。

枯れ葉でふいた家々の並ぶ難民キャンプでは、今日も子供たちが元気に自分たちの民族の言葉を学んでいることだろう。そのエネルギーが、ビルマの民主化と民族の平和的共存のために向けられる日が一刻も早く来るようにと、願うばかりである。

タイービルマ国境での主な援助団体は、内線からタイ側に逃れてきた難民を支援するコンソーシアムのほか、学生への支援を行うBCG、医療活動を行なうMSFがあります。JVCは現在日本で集まったお金をコンソーシアムに委託し、その使い道について話

しあう月一度のバンコクでのミーティングに参加しています。

ひき続き、ビルマ少数民族難民救援募金をお願いいたします。（大石道子）

<送金方法>

下記の郵便振替の口座へ「ビルマ募金」と記入の上、ご入金下さい。

東京9-27495 加入者名：JVC東京事務所

難民キャンプに桃源郷を見た

池島千津子

11月12日、先に出発したメンバーに遅れて、夜ひとりでメソット行きバスに乗る。ジャンパーやセーターを着てる人を見て、北に向かうのだという思いを新たにした。やはり、直接行って見てこなければ、何かをやろうとか、問題意識を深めることは私にはできない。日本でビルマについてほんの少しだけ活動していた時も、現場を見ていない腰の弱さが私にはあったからだ。

バスは国境沿いに走っているのだろうか。メソットまであと1時間ほどという地点になって、国境警備員らしき役人がバスに入ってきた。パスポートを持ってこなかった私は寝たふりをしていたが、3人の若い青年たちがバスから降ろされた。約10分ほどバスは停まっていたが、3人はもどってこなかった。隣に座っていたオバちゃんが「ビルマ人よ」という。そこからほんの数キロ離れた隣国の人と知らずに、バンコクからの道程を共にしたのだ。あと少しでメソットなのに捕まるなんて、なんてバカバカしく残念だったにちがいない。バスを降りる学生らしき3人のあきらめたような開き直った笑いを、今さらのように複雑な気持ちで思い出す。バスは2時間遅れでメソットに到着した。

13日と14日はカレン族のキャンプを4つ（ドンパキアン、メーラ、モンカー、ワンカ）とモンカーに隣接する学生キャンプを訪ねた。この時はカレン難民自治組織のNo.3の女性が私たちと同行してくだ



さった。

すべてのキャンプに小学校、ハイスクール、クリニックがある。学生キャンプとワンカーキャンプに一人づつ欧米人の教師を見かけたが、それ以外の人はすべてカレン族かビルマ族だった。教会やワットもある。食糧援助やMSF（国境なき医師団）などの協力もあるが、それらも彼ら自身の手により活かされている。

チェンマイにあるというカレン語の印刷所で作られた教科書で学ぶ学生たち（小学生はカレン語、ハイスクールは英語で教えているという）。カレン語の教会音楽を四部合唱で歌ってくれた青年たち。そこがどこであろうと、彼らがいる所は彼らの国で、自分たち独自の言葉、文化、習慣、伝統に基づく生活を実践している。それらを守るためには命を賭ける。すごいと思う。自らのアイデンティティを守り続ける彼らには、接する者を感動させる強さがある。ほんの短い時間しかキャンプにいなかった者の戯言かもしれないが、カレン族のキャンプに桃源郷を見たような気がした。

ワンカーキャンプで、とても印象的なマリー・ルーという60歳近くの元気な女性のキャンプリーダーに会った。彼女の人生そのものが、力で制圧しようとする支配者との闘いだといえるのではないか。日本軍がカレン族に隠まわれていた当時わずか9歳だったという彼女が、日本兵から教えてもらったという歌（夕焼け小焼け、君が代、軍歌やおそらく当時の流行歌など）を披露してくださった。朗々とした歌声、堂々とした態度から性別を越えた人間的な魅力を感じさせてくれた。

2日間の日程を終え帰途に着いた。カレン族と学生キャンプの両方を訪ねられたことは、私にとってとても良かった。その二つの動きを混同しがちだったからだ。でも正直に言って、これからどういう風に動いていったら良いか自信がない。私にできる情



報収集を続けていく、よく知り関心を寄せ、正確な情報を人に伝えていくことはやるべきだと思う。またできることなら、モン族のキャンプやマナングローブにあるというDAB(Democratic Alineance Burma, 各小少数民族の代表部により構成されているという)を訪ねたい。

未来のために闘う人々

坂根宏治

ビルマには多数勢力としてのビルマ人とビルマ・タイ国境付近に住む少数民族（カレン族、カレン族、モン族など）がいる。ビルマ難民の多くは少数民族の人々であるが、ビルマ人の中にも学生や僧など難民になった人々がいる。今回は、カレン族のキャンプとビルマ人学生キャンプを訪問することができた。

花に包まれたキャンプ

まず気がついたことは、どのキャンプにも花が咲き乱れていたことである。言うまでもないが、彼らの生活は決して豊かなものではない。米はくず米だし、料理に出てくるのは野菜ばかりで肉はなかった。一度白っぽい大便をしている子供を見かけたことがあったが、人々の健康状態はとても「健常」といえるものではない。それはともかく、難民キャンプといえば殺伐とした雰囲気と奪い合いのイメージしかなかったため、花が咲き誇るビルマ難民のキャンプは私にはすごく新鮮に映ったのだ。

彼らの教育風景にも目を見張るものがあった。どのキャンプでも、難民たちは自らの力で活気あふれる教育を行っている。教科書はほとんどないが、英語、ビルマ語、カレン語、科学、歴史、地理、数学など7～9教科にわたるカリキュラムが組まれていた。彼らは、将来その教育が役に立つと固く信じて

いるようだった。自分たちの力で自分たちの未来を切り開いていく、そんな意気込みが感じられた。

しかし、彼らを取り巻く環境は過酷である。ビルマ政府による情報のかく乱により、世界中の人々が難民たちについて知る機会を奪われている。たとえば、国連の難民高等弁務官である緒方貞子さんが少数民族に対する人権侵害の様子を視察に来た時、ビルマ政府は少数民族居住区へ行く許可を出さなかった。しかしビルマ政府の報道では、「緒方さんは少数民族に関心を持たなかったので、その居住区に入らなかった」と伝えたのだ。このように事実がねじ曲げられることは珍しい話ではない。

さらに難民たちはタイとの関係にも気を使わなければならない。今回視察したワンカーキャンプはウェイカローというタイの村に隣接している。当然そこにはタイ人との間にさまざまな関係が生まれる。タイの商人がキャンプで物を売ることによってタイ人は利益を得、難民たちは欲しい物を手に入れる。

また、他のキャンプでは家畜が飼われているが、ワンカーキャンプで家畜を見ることはない。タイ人の田畑を荒らさないようにという配慮から、難民たちが家畜を飼うことを自制しているのである。祖国の地を追い出された後も、難民たちにとって心安まる場所はないのである。

決して服従はしない！

学生たちのキャンプは、カレン族のキャンプと状況が異なっていた。私たちが見学したキャンプは、カレン族のモカーキャンプに接する所にあり、ここには、学生とその間に生まれた子供たち合わせて約200人の難民がいる。

このキャンプでは、23歳の医学部の学生が私たちの案内役を務めてくれた。彼のTシャツには赤い塗料で、“OUR HEADS ARE BLOODY BUT UNBOWED”と書かれていた。血まみれになっても服従はしない——彼らの気持ちを表しているのだろう。

学生たちは、1988年に全ビルマ人学生民主戦線(ABSDF)を組織した。しかし案内役の学生は、この名前からは想像もつかないほど温和な話し方をしていた。彼は2カ月後には戦闘のためビルマに入ると話してくれた。今まで彼らを支援してきたBCG(ビルマ調整グループ)が1991年3月で援助を打ち切ると宣言したことにも絡んでいるのだろう。BCGとしては、闘争に走る学生たちをこれ以上サポートできないと判断したため、援助を打ち切ったようだ。

学生たちは戦闘を放棄さえすれば、難民キャンプで安全に暮らすことができる。まだ20代の若物たちが命をかけてでも状況を変えようとする姿に、いたたまれない思いがした。

私たちの現状を正しく伝えて下さい

今回、カレン族とビルマ人学生のキャンプを見学しながら、いつも頭の隅につきまっていたものがあった。「私たちに何ができるのか」ということである。私はモカーキャンプの学校の先生にこの質問を投げかけてみた。彼女は思いもかけない質問だったというような笑みをこぼした。そしてしばらく経った後、「私たちの現状を正しく伝えてほしい」とだけ言った。「生活物資や教科書など不足しているものも多いから、物質的なサポートも必要なのではないの」と、私は続けた。「もしもらえるのだったらほしいわね」。彼女が話したことはそれだけだった。失礼な言い方だが、私は、こちらが切り出す前に、「これがほしい」「あれがほしい」と次々に要求が来るのではないかと思っていた。ところが難民の方から何か要求が出されたことは一度もなかった。彼らは淡々と自分たちの生活について話すだけであった。

ビルマの難民たちは、自分たちの力で自分たちの未来を切り開いていこうと熱意を燃やしていた。強力な団結力と向上心で、理想を現実のものにしていく努力を見せてくれた。難民→かわいそう→援助という自分の短絡的な発想が恥ずかしかった。いいかげんな援助は、かえって難民の自立を妨げる。それゆえ、これから私たちが彼らとどのようにつきあっていくかは、慎重に考えていく必要があるだろう。

しかし、今すぐ始められることもある。モカーキャンプの先生が話してくれたように、彼らの現状を伝えていくことだ。彼らのより良い生活を求める心は、巨大な権力の下にたたき潰されそうになっている。その上、それについての報道は、ほとんどシャットアウトされている。この現状を伝え、世論を形成していくことが、今最も求められていることではないだろうか。





タイで農民会議

1991年5月2～10日に、JVC主催で、東南アジアにおける「農業と環境」に関する国際会議がタイにおいて開催される。

この会議では ①タイ・ラオス・カンボジア・マレーシアにおける森林破壊を中心とする環境破壊の進行 ②環境破壊を回復するため、東南アジア諸国で試みられている「森林農業」「複合経営農業」「地域植林」「等高線農業」「自然農業農法」の試みが議論される。この会議の特徴として、政府関係者や学者だけではなく、新しい農業を試みている農民の発表、そして彼らとともに活動するNGOの発表があげられる。また実際の農業の現場を視察しながら会議ができるように、開催地もチャイブーン県、コーンケン県、チェンマイ県、チェンライ県と移動する。これらタイの北部、東北部は換金作物栽培による環境破壊が進んでおり、これらの地域での生態系回復を目指した農業は世界的に注目されている。

参加総数は約60名で、日本からはJVCのメンバー5人と朝日新聞の松井やよりさんが出席し、タイからは30人、ラオスから6人、カンボジアから7人、マレーシアから4人が参加、これにタイの記者やJVCのタイ人スタッフが加わる。

会議の内容は以下のとおりである。

- 5月2日 JVC代表岩崎駿介の基調報告
チャイブーンのJVCの植林・農業の視察。その後グループディスカッション
- 5月3日 タイのNGOのTHIRD, TREEによる持続的開発のための農業の報告
- 5月4日 コーンケン県のプーヤイ・パイ村長と農民、NGOの発表
- 5月5日 農地視察とそれについてのグループディ

スカッション

- 5月6日 ラオスの環境破壊と新しい農業への取り組みについての発表。カンボジア、マレーシアの農業についての発表
- 5月7日 チェンライへ移動
- 5月8日 チェンライ、チェンコンの農地視察とディスカッション
- 5月9日 チェンマイに移動し、農地視察とディスカッション
- 5月10日 最終討論とお別れパーティー

9月に会議の報告書を発刊する予定です。編集を手伝って下さる方は御連絡下さい。(東村康文)

セミナー『カンボジア』

CYR・JVC・SVA主催

カンボジア難民流出をきっかけに発足した三つの民間団体が、カンボジアについて合同セミナーを開いている。

6回で構成されているこのセミナーでは、カンボジアの歴史や文化・教育・福祉、またカンボジア問題とその背景、国内復興などがテーマとなっている。「紛争の犠牲となっているカンボジアの人々の問題を、日本にいる自分たちの問題としてとらえる機会にしてみよう」というのが主催者側の願いである。

毎回50名以上の方が参加するこのセミナーも、この5月で5回目を迎える。和平気運が高まっているカンボジアへの関心も、徐々に高まっているといえそう。今後の日程は、

- 5月25日(土) 「国内復興の状況と今後の展開」
講師：熊岡 路矢
- 6月29日(土) シンポジウム

たくさんの方の参加をお待ちしています。詳しくはカンボジア担当の鈴木まで。

6月9日は 第9回 JVC 会員総会 です

午後1時より

東京都婦人情報センター
(飯田橋セントラルプラザ15階)

この人に聞く

JVCのアフリカ応援団長

秋山忠正さん



「今も覚えてますが、1965年ピースコー（平和部隊）のことを知ったときには、こういう生き方もあったのかと、全身に電気が流れたような気がしました。戦争から帰って20年あまり、旧財閥系の会社で最小のコストで最大の利益を上げることが熱心に追求していただけに、いわば宗教的な啓示を受けたような気がしました」

と、秋山さんは今でもなつかしように話します。

「そのときには、日本の青年海外協力隊もすでに発足していたのですが、いの後5年くらいはその存在も知らず、自分も何かできないかと悶々としていました。そこへ偶然協力隊の2代目事務局長が戦友だった縁で、協力隊を育てる会の仕事をもってきました。それ以来、年に1カ月くらい休暇をとっては、隊員の支援のため、主としてアフリカを中心に海外に行くようになったわけです。

それから10年近く経過して、いわば第二の開眼と言うべきめぐり合わせがありました。エチオピアのアジバールでの緊急救援が一段落して、林さん（現JVC事務局長）たちがマーシャ村で農村開発プロジェクトを展開していた現場を訪ねた時のことです。JVCのスタッフの活動ぶりを見て、これが本当の支援活動だ、私のたどるべき道はまさにこれだと、じーんときました」

「ばくは、あと10年ぐらい生かしてもらうつもりだけど、西アフリ

カの緑化に集中しようと思っています。もっと現地の人たちと積極的に対話をしたいと、今はフランス語の特訓中ですが、あと2年くらいはかかりそうです」

と、元気な秋山さんに、なぜ、アフリカなのかを聞いてみました。

「もちろん、アジアに努力を集中すべきだ、という議論も知っている。歴史的な関わり、地理的な近接、経済的なつながり……。しかし本来援助とか協力とかは、GIVE & TAKEというような理屈や計算ではない。逆説的だが、しいて言えば、あらゆる面で日本から遠く離れているから心ひかれるのかもかもしれません。

また今は、TPLF（チグレ解放戦線）の手に陥ちてしまったあのマーシャ村や村人への愛着かもしれないし、また3年通ったマリ北部のサヘルの会の現場の人たちの面影や生活が心の底に残っています。

こういうへそ曲がりの人間が少しはいてもいいじゃないですか」

今思えば、そんなに純粋なものではなかった、と秋山さんもおっしゃる、平和部隊との邂逅から20年。仕事の第一線をしりぞいた現在、JVCの執行委員、協力隊を育てる会常任理事、「サヘルの会」常任顧問などを務めるだけでなく、緑の協力隊を西アフリカに送ることに尽力されています。官製援助にNGO……、幅広い視野のなかで、JVCはどう写っているのでしょうか。

「協力には目的で分けると、緊

急救援と長期的なものと2種類がある。ひとつは（今回の柴田君の行動のように）湾岸戦争が終わってすぐさま、中東に人を派遣するなど、激しく動く情勢に素早く対応していかなければいけないもの。もうひとつは、「サヘルの会」の植林活動のように重心を低くして、長期間地道に協力していくもの。

やり方に関しても、やはりふたつあって、国連機関や現地政府とある程度協力してやる方式と、主として草の根の民衆と手をつないで活動をすすめるボトム・アップ方式があるが、前者は効果が数字に現われやすく、資金の提供者には報告しやすい。しかし、そこに住む人間の意識を変えるという視点が弱いから、失敗に終わりやすく、それぞれの地域のためというより、日本人のための援助になりかねません。

後者は人間の意識変革に重点を置くため、時間がかかるし、大変難しい仕事になる。またその成果の評価が難しく、自己満足や近代的なものからの逃避に陥りかねないわけです。

実際のアプローチに当たっては、上述の諸方式を具体的に組み合わせながら運営してゆくことになると思いますが、中小組織のNGOと違って名実ともに日本のNo.1のJVCとしては、緊急性、長期性、トップダウン、ボトムアップの諸方式を兼ね備えて活動する。それも、それを統合し、両立させる組織と方法を考えながら」（AG）

JVCプロジェクト

1991年3月25日現在

活動地名	活動内容	担当者	支援団体
東京本部	渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計、総務、情報収集および広報等。 機関誌「トライアル・アンド・エラー」発行。 JVC説明会—毎月第1月曜日 午後6時～8時 毎月第2, 4土曜日 午後2時～4時	岩崎駿介（代表） 林 達雄（事務局長） 熊岡路矢、星野昌子、 前川昌代、山口誠史、 鈴木由子、今泉 恵、 富安光子、富安庸太郎、 柴田久寿子、柴田久史、 高梨直樹、岩間邦夫	全国社会福祉協会
JVC神奈川	神奈川県内での渉外、事業計画、資金調達等を行う。 神奈川県及び各市町村の他の民間団体とともに、湾岸戦争被災民への支援募金キャンペーンの企画調整に関っている。 第三世界理解講座の準備を進めている。	清水俊弘	
	●定住難民プロジェクト 2月27日、横浜市立平戸中学校のPTAを対象に、ラオス・カンボジア伝統舞踊と子どものしつけに関するパネルディスカッションを行った。ラオス人のビルン・ピンマチャンさん、カンボジア人のイム・キムスールさんが踊り手、パネリストとして参加した。 3月19日、大和定住促進センターにおいて第14回ボランティア団体懇談会があり、一時帰国しているパナニコム日本語学校の蘭牟田がキャンプの現状などを報告した。	小野豪大、他約60人	ジャパン・タイムス、神奈川県福祉部、禅林寺龍華会基金、ケアハウスさくら苑、明るい社会づくり運動神奈川県協議会
環境 タイ (チャイヤブーン県)	●植 林 JVCの植林農業センターでは、雨期に備え苗木作りが順調に進んでいる。 ●国際会議 5月2日の開催に向けて4カ国60人の参加が決定。受け入れNGO、訪問先も決定した。	岩崎美佐子、谷山博史、 加藤真理子、Komain Soongsumalaya、 Kasemsan Sriwatana、 Chukiat Katchama- ttiya, Prasit Ingo、 Chalaem Kaewchoho	庭野平和財団、 日本住宅協会、 YOKE ジャスコ
調査・研究	- 東南アジアの森林破壊と換金作物についての研究 - 人間居住キーワード辞典の作成 - タイにおける過去数十年間の降雨特性の分析	束村康文、久保早恵	FASID 国土庁

活動地名	活動内容	担当者	支援団体
エチオピア (東ゴジャム州) ビチェナ	●ビチェナ緊急救援活動 東ゴジャム州青ナイル川沿いの、干ばつ被災地における緊急食糧配給は、1月25日をもって終了した。この食糧配給により、44カ村、7万7,000人の人々が干ばつによる飢えをまぬかれた。この間の受益者はのべ14万人、配給食糧は1,450トンにのぼった。その後同地域で、栄養失調児に対する保健栄養指導、衛生的な水の確保のための泉の保護などを行ってきたが、2月末の反政府軍の進攻により中断せざるを得なくなった。現在反政府軍は首都アジスアベバの北80kmのところまで迫っている。 ●今後のエチオピアでの活動 4月22日、今後JVCがエチオピア、またはアフリカに対してどのように関わっていくかを決定する。	山田 盛、江原浩昭、 江原広美、田尻真由美、 寿賀一仁、Solomon、 Shikur, Ali、 Tekleyohannes、 Yodit	CRDA, WFP、 犬養道子・みどり一本運動、 モラロジーMIRC、 東京グリーン・ ウォーク、西本願寺、 Tree for lifeの会、 中部善意銀行、 毎日新聞社会文化事業団、 JVCカレンダー、 メサイアコンサート、 エチオピア救援バザー
ベトナム ホーチミン市 ハイフォン市	●地域総合復興(南部) ひきつづき第8区・ビンチャン郡において、障害をもつ子どもたちの訓練校、エビ冷凍工場で働く子どもたちのための夜間補習・識字学級、病院/産院、職業訓練施設などへの設備改善支援を行っている。ヒーボンスクールにミニバスが到着、フォンフォー小中学校5教室の改築が完了した。 ●帰還難民のための職業訓練(北部) 第1回の電気クラス(34名)が4月に8カ月の訓練期間を終える。第1回の洋裁クラス(30名)が3月末終了した。 自動車、バイク修理及び木工のクラスは6月開講をめざして、ワークショップの建設、機材の購入等を進めている。	熊岡路矢、中野周二、 稲見 圭、稲見由美子、 (南) Dinh Khac Mien (Paccomm) Cai Bich Thuan (第8区) Le Thanh Hai (住宅土地建設利用局) (北) ハイフォン市 Nguyen Luong Trao Dao Cong Hai Nguyen Van Long	(南) 庭野平和財団 立正佼成会 メサイアコンサート (北) UNHCR
カンボジア プノンペン市 カンボット県 カンダール県	●サンタビエップ技術学校/ワークショップ 車両による国内輸送が復興のために果たす役割を重視し、①ワークショップ(修理工場)の設立 ②自動車の部品等の供給 ③自動車整備士の養成を初期の目標として、1986年にこの事業を開始した。JVCは現地実施機関の運輸省自動車輸送公社と人材面、技術・理論面で協力し、90年9月から第三期の訓練を開始した。現在5人の孤児青年を含む33人が訓練を受けている。 ●母子保健活動 カンダール県プノンペン郡とさらにクサイ・カンダール郡、コ・トム郡、キエンスバイ郡など6郡で助産婦・伝統産婆訓練を実施し、医療器具・医薬品の供給などを行っている。また、プノンペン郡ではCBHC(Community Based Health Care)の活動を行っている。 ●井戸掘り・給水 1990年から農業省水利局とOXFAM・LWS・JVCとの共同作業になり、バットンバン県、カンダール県など7県で、合計42本の井戸を掘った。当初90年中に90本を掘る予定だったが、内戦や東欧・ソ連の援助撤退の影響で、井戸の数が約半数に減ってしまった。	古西 勇、馬 清、 本橋 栄、竹井潤子、 飯島かんな 「現地の実施・調整機関 と主な担当者」 (運輸省) 国際局 Meas Semeth 自動車輸送公社 Thach Cang (保健省・母子保健局) Ann Sarun医師 保健委員会 Nhim Nhem医師 プノンペン郡 保健事務所 Sam Sarung医師 母子保健活動 Tui Kath Mat Samon (農業省 水利局) The Iv Khim 井戸掘り活動 Hok Setha So Sarin	創価学会青年平和会議、モラロジーMIRC、 立正佼成会、日産 労連、西本願寺 高岡寺族青年会 毎日新聞大阪社会事業団、 浄土宗東京教区青年会、 国際保健協力市民の会(SHARE)、 四日市商業高校、 JVCカレンダー、 カリタス・ジャパン、 真如苑、 メサイアコンサート

活動地名	活動内容	担当者	支援団体
ラオス ヱエンチャン県 ボーリー・カム サイ県 カンムアン県	●生活改善普及員養成プロジェクト 保健衛生、農業、教育など生活全般の改善に携わる女性の生活改善普及員を養成すると同時に、普及員の地域開発活動を支援している。 現在各県で普及員による村人を対象にしたトレーニングが、JVCの建設した3カ所の母子センターを中心に行われている。日本難民奉仕会(RIJ)のメンバー4人の視察訪問を受け入れ、井戸掘り及びトイレ作りのプログラムを紹介した。	谷山博史、北詰秋乃、 原田恵津子、 Thanongsi Solankum Maliphet Sukkhasume (ラオス女性同盟) Khamone Phetdao- heuan, Khampone Saignavong	UNDP, UNIFEM, 庭野平和財団, NVC, 日産労連 ギャラリーイカ ット, 聖ヨゼフ 老人ホーム, 難 民と地球の緑を 考える会, グル ープ・カンガル ー, メサイアコ ンサート, JOCV, JVCカレンダー ジャパンタイムズ RIJ
タイ バンコク	①総務、会計、資金調達 ②各機関(国連、タイ政府、日本大使館、各国民間援助団体)及び東京事務所、ラオス・カンボジア・ベトナムを含む、各プロジェクトとの連絡調整 ③情報収集、広報活動、④在タイ日本人との連絡調整 ●奨学金プロジェクト ルアム・ボーカオスラムの立ち退きを契機に、CCSD、スラムスタディーグループ、住宅公団が集まり、立ち退きに直面したスラムにいかに対処すべきかミーティングを重ねている。 ●クロントイ図書館 1月31日より学校に行っていない子供8人(7~11歳)に、タイ語、算数を教え始めた。 シンナー遊びをしている青少年への聞きとり調査はひき続き行っている。	Pornpimol Chaiboon, Kamol Mingmuang, Manas Torkan Suntaree Lawsuan, 池島千津子, 主婦ボラン ティア15名 Samruay Jongyork- lang	全国社会福祉協 議会 メサイアコンサ ート Tree for life の会, 雄勝町町 内寺院会, 国際 ソロブチミスト 駿河, からし種 モラロジーMIRC, 国際ソロブチミ スト山形, 山形 中央ライオンズ クラブ, 太田慈 光会
カオイダン (カンボジア 難民キャンプ)	●西崎憲司記念技術学校 山形よりドライビングコース教習のため、2台の自動車到着。タイ政府より寄贈された3台、JVCの1台と合わせ、合計で6台の車で運営し、生徒の収容人数も増やしていく。 かじ屋及び大工コースで作られる農具類を、カオイダン内の他団体(YWAM)の農業プログラムに活用させている。	Somyot Rattanatham Sutthi Netprakhon, 井本勝幸, 井本美奈	UNHCR, SV (Stichting Vluchteling) 山形日産, 日産 労連
パナニコム (第三国定住待ち キャンプ)	●日本語学校 キャンプ内のベトナム避難民がシキウキャンプへの移動に反対し、デモンストレーションを行ったため3月4~15日までスタッフはキャンプに入ることができなくなった。しかし3月18日より平常どおり授業を行っている。 タイ内務省が難民資格審査をシキウキャンプで行うことにしたため、これに同意したベトナム避難民がキャンプに移っている。 3月7日、ベトナム難民1名が日本へ帰った。 生徒数 ラオス人(大人) 101名 (子ども) 23名	竹村雅義, 熊沢ゆり, 岡村達司, 蘭牟田浩美, 鈴木彰子, Chowarite, Duangprom	IOM
プリラム県	●農村開発 米銀行の準備を進めている。 JVCタイスタッフにより、プリラム農村開発プロジェクトの評価が行われた。	Thongkham Sumru- engram	モラロジーMIRC, JOFIC, JVC カレンダー

